

六 天の川

現代の和歌

佐佐木信綱

三重縣の人、明治五年(一八七三)生、文學博士。

佐佐木信綱

○ 天の川さやかに澄みて遠蛙鳴く音したしき夜ごろとなりぬ

淺ま山をのぞみて
いかばかりそのおもひの深からむ千とせを經てもたつけぶりかな 信綱

尾上柴舟

名は八郎、岡山縣の人、明治九年(一八七六)生、文學博士。

尾上柴舟

○ ゆふもやは青く木立をつゝみたり思へば今日は安かりしかな

釋道空

本名は折口信夫、大阪市の人、明治二十年(一八八七)生、文學博士。

釋道空

葛のはな踏みしだかれて色あたらしこの山道を行き

し人あり

北原白秋

○ おのづからうら寂しくぞなりにける稗草の穂のそよぐを見れば

やしの實のからにいたる茶の花のほのかにしるき冬はまにけり 白秋



北原白秋筆

齋藤茂吉

山形縣の人、明治十五年(一八八二)生、醫學博士。

齋藤茂吉

○ うちよせし波のしらあわ消ゆる音岩間にひゞき日ぞ真晝なる

窪田空穂
名は通治、長野縣の人、明治十年(一八七七)生。

窪田空穂

金子薫園

名は雄太郎、東京市の人、明治九年(三五六)生。

社頭雪

みづ垣に淡雪かゝり神殿のおくふかくともる晝のみあかし

薫園

前田夕暮

名は洋造、神奈川県の人、明治十六年(三五三)生。

古泉千楳

名は幾太郎、千葉県の人、昭和二年(二五七)歿、年四十二。

春のあめ降るとは見えぬ檜葉の葉にしづくたまりて
静かにこぼる

金子薫園

武藏野のかぜの夜に來て落葉のさびしき音を聞きつ
くしけり

金子薫園筆蹟

前田夕暮

ひまはりは金のあぶらを身に浴びてゆらりと高し日
の小ささよ

古泉千楳

鹿野

千葉縣の西南部にある山。

結城哀草果

名は光三郎、山形縣の人、明治二十六年(二五五)生。

與謝野晶子

堺市の人、明治十一年(三三三)生。

今井邦子

名は邦枝、長野縣の人、明治二十三年(三五〇)生。

岡本かの子

東京市の人、明治二十六年(三五八)生。

降りすぎる夕立雲はいや暗く鹿野のみやまをおほひ
けるかも

結城哀草果

金色のちひさき鳥の形して银杏散るなり夕日の岡に

與謝野晶子

細やかに散りゆく庭の萩もみぢ目に立たなくにあは
れ散りしく

今井邦子

わがいのち寂しけれども白梅のはな咲くはるにまた

岡本かの子

中原綾子
長崎市の人、明治三十一年（三十五）生。

逢へりけり

○

中原綾子

板倉重宗

京都所司代たること三十餘年、承應三年（三三）歿、年七十一。

湯淺常山

名は元嶺、岡山藩士、江戸時代の儒者、天明元年（四）歿、年七十四。

職

京都所司代をいふ。

父子

勝重と重宗。

愛宕山の神

山城國葛野郡愛宕山上にある愛宕神社の祭神、即ち伊弉諾尊及び火産靈命。

○松本楓湖

名は敬忠、茨城縣の人、邦畫家、大正十三年（二六）歿、年八十五。